

琉球大学学術リポジトリ

統合保育における自閉症圏障害児に対する食事および排泄の指導と保育者の子ども理解

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): mainstream classroom, autistic spectrum disorder, fundamental life-skill, caregiver's understanding of a child, communication between a child and a caregiver 作成者: 財部, 盛久, Takarabe, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5094

統合保育における自閉症圏障害児に対する食事および 排泄の指導と保育者の子ども理解

財 部 盛 久

Understanding a Child with Autistic Spectrum Disorder by a Caregiver and
Supporting of a Child with Autistic Spectrum Disorder to Learn Their Routine
Tasks of Eating and Going to the Bathroom in a Mainstream Classroom

Morihisa TAKARABE*

<Summary>

This study examined how supporting a child with autistic spectrum disorder to learn the routine tasks of eating and going to the bathroom would be influenced by a caregiver's understanding of a child with autistic spectrum disorder. The caregiver observes the child carefully, and as the caregiver's concern of meta-level progresses, the caregiver's understanding of the child is also greatly improved. Consequently, the caregiver's support changes to respect self-direction of the child. In connection with the change in the caregiver's support, the caregiver's support of eating and going to the bathroom has improved as if the child might have been the caregiver's support. Finally, the caregiver respects the self-direction of the child and offers a flexible support system. It was discussed that the importance of fundamental life-skills such as eating and going to the bathroom should be supported through good communication between the child and a mainstreamed classroom caregiver is very important.

Key words: mainstream classroom, autistic spectrum disorder, fundamental life-skill, caregiver's understanding of a child, communication between a child and a caregiver

I. はじめに

私たちにとって食事、排泄、睡眠は健康でリズムのある充実した生活を送るには重要な活動である。言い換えると、これらの条件が十分に満たされて初めて、心身共に健康で質の高い生活の基礎ができ上がる。人生の初期に当たる乳幼児期は、どのような形であれこれら3つを満たすことを最優先とする段階から、その社会・文化のなかで好

ましいと考えられている様式で満たすことが求められる段階のいずれかにある。幼児と母親との食事場面は、食物を摂取するという生理的意味合いの強い場からコミュニケーションを行い、会話を楽しみながら食事するという文化的あるいは社会的意味合いの場へ変化するとの指摘¹⁾はこれを裏付けるものである。特に幼児期後半では、食事や排泄を年齢相応のやり方で対処するための技術を確実に身につけることが重要な課題となっている。

食事や排泄などに関する日常生活の技術は基本

*Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

的生活習慣といわれるように、私たちが自立した生活を送るための社会的能力の基本と考えられている。したがって、乳幼児期の子どもが生活する家庭や保育所、幼稚園では生活のあらゆる場面を通してこれらの技術を教えることになる。しかし、すべての子どもがこれらの技術を同じように習得できるわけではない。特に障害のある子どもの場合は、私たちにもっとも基本的な食事を摂ることさえも大きな課題となる場合があり、時間をかけ種々の工夫を重ねながら指導することが必要になる。そのため、障害のある子どもの食事や排泄などの日常生活技術を身につけさせるための試みが積み重ねられている^{5), 6)}。

ところで、乳幼児精神発達検査による自閉症の発達経過の検討では、「食事・排泄・生活習慣」の領域は自閉症児にあっては加齢に伴い発達進歩を示しやすい領域である^{4), 10)}。しかし、個人差も大きく、子どもの状態を見極めたうえで工夫して指導する必要がある¹⁶⁾。自閉症の食事や食行動について、自閉症特有の偏食や食行動異常のあることが報告されているが、同時に対処次第で改善することも指摘されている^{3), 11), 13)}。排泄に関しても自閉症は特定の場所以外では排泄しない、遺尿や遺糞をしても素知らぬ態度で知らせようとするなど、自閉症の排泄習慣の形成・矯正には困難を伴うことが指摘されている¹⁶⁾。

財部(2002)¹⁴⁾は統合保育における自閉性障害児の保育において、保育者が保育者主体の保育から子ども主体の保育へ変化することにより、保育者の子どもに対する働きかけ方が変化し、子どもも大きく変化したことを報告した。そして、このような変化が生じるには保育者の子ども理解が大きなポイントになることを指摘した。この研究では対象児の行動と保育者の子ども理解を中心に、対象児と保育者の関係について検討がなされた。しかしながら、保育所における日常生活のなかで基本的な生活習慣といわれる食事や排泄の指導がどのように行われたのかについては触れられてはいない。

そこで本稿は、保育者の子ども理解が保育所における食事および排泄指導にどのように影響するのか保育経過に沿ってその変化を明らかにすることを目的としている。また同時に、基本的な生活習

慣の指導が円滑に行われるための要因についても検討する。

II. 方法

1. 対象児

1) 対象児

財部(2002)¹⁴⁾の対象と同じヒデキ(仮名)、保育所入所時の年齢2歳7ヶ月の男児。第1子として誕生し、両親と本児の3人家族。

2) 保育所入所時の食事および排泄の状態

〈食 事〉：食事を準備していると配膳が終わるまで待つことができず、ひとり勝手に食べてしまう。スプーンを使うことはできるが手づかみで食べることが多い。その食べ方は噛まないで飲み込むようにして食べてしまうので食べ終わるのが早い。そのため、食べ終わるとすぐに席を立ち部屋の中を走り回る。偏食があり好きなご飯、麺類、揚げ物はよく食べ、隣の子どもの分まで盗って食べてしまう。しかし、嫌いな野菜類は一切口することがない。

〈排 泄〉：パンツに排尿してもそれを知らせることはもとより、不快な様子を示すことすらないが、便をした時は時々、泣いていることがある。排泄の自立ができないため、家庭ではトレーニングパンツをはかせている。

以上のようにヒデキの食事と排泄の状態は、これまでに報告された自閉症の特徴的行動によく合致している^{3), 11), 16)}。

2. 保育体制

財部(2002)¹⁴⁾の報告と同一のB保育園で、統合保育による保育を10年以上前から行っている。対象児のクラスには本児以外に障害児保育の対象として保育1年目は1名、保育2年目からは2名が保育を受けている。筆者はA市の障害児保育の巡回相談講師を担当し、毎月1回保育所を訪問して相談に応じている。本児のクラスには、クラス担任と加配の保育士が配置されており、加配保育士が障害児保育の担任保育士として、本児を4年間保育にあたった。

3. 分析資料

本研究では財部(2002)¹⁴⁾と同一の資料を用いた。すなわち、巡回相談時の担任保育士からの保育経過報告資料、A市障害児保育実践報告資料および筆者の巡回相談記録4年分を分析の第1次資料とした。この第1次資料を時間経過に沿って、食事指導および排泄指導に関する事項を子どもの行動と保育者の行動に分けて整理したものを第2次資料として分析に用いた。

III. 結果

1. 保育1年目の指導経過

1年目の保育では保育士自身が障害児保育はもとより、初めて保育をするということもあり、子どもをどのように理解すればいいのかわからない。担任保育士としてヒデキと関わるようになったが、ヒデキの行動に戸惑いを覚えることが多く、担任がヒデキと1対1の関係が持てるようになったのは、入所後半年以上たってからであった。

1) 食事指導の経過

保育1年目の食事指導経過は表1に示すとおりである。入所して間もない4～5月のヒデキの食

事は以下のようなものである。ヒデキは食事の意欲はあるが、御飯、麺類、揚げ物など限られたものだけを食べて、野菜類はまったく口にしないという偏食で、好きな物は隣の子どもの物を盗って食べるが、嫌いな物は一切口にしない。また、食事が準備されるとみんなが揃うまで待つことができず、ひとりで勝手に食べ始め、食べる時は手づかみで食べるという状態である。食事を始め一定の量を食べて満足するようで、そうなると遊び食いが始まるか席を離れて保育室の中を歩き回るかのいずれかの行動になる。

これに対する担任の対応は、偏食に対しては何とか食べさせようとするいろいろなものを食べるように働きかけるがヒデキは応じることはない。手づかみで食べるヒデキに、担任は直接、手づかみを注意することはせず、ヒデキの手を取りスプーンで食べさせる。ヒデキは担任が介助するとスプーンで食べるが、介助をやめると手づかみで食べる。担任は手づかみであってもヒデキが自分から食べたことを褒めている。しかし、盗食に対しては、ヒデキがことばをどこまで理解できるのかわからないが、担任はヒデキを厳しく叱っている。また、ヒデキが食事を待てないことあるいは食事後

表1 保育1年目の食事指導経過

	子どもの行動	保育者の対応
4月	好きな物だけ(御飯、麺類、揚げ物)食べる 手づかみで食べ、遊び食いがある 好きな物は隣の子どもの物を盗って食べる 食べ終わると席を離れ歩き回る 挨拶まで待たず、ひとりで食べ始める かまわずに飲み込んでいる	← 食べるように促してみる ← 側につき、食べたことを褒める。手づかみを注意することはせず 保育者が介助しながらスプーンで食べさせる ← いけないことだと厳しく言う ← 待つように話して聞かせる ← 保育者がかんで飲み込むのを見せる
5～6月	野菜はカレー味の時のみ食べる 手づかみで食べるが、カレーやシチューなど手が汚れるものは スプーンで食べる 噛まずに飲み込むようにして食べる 欲しい物は保育者の手を取り欲しい物を教える 椅子に座る時間が長くなる	← 声をかけながら楽しい雰囲気をつくる ← 手づかみの時はスプーンを使い介助する ← 保育者が噛んで飲み込むのを見せる
7～8月	ご飯を汁につけて食べることを好み保育者の手を取り要求する 食事が準備されるまで待つこともある 食後の麦茶を保育者の手を取って教える	← 要求を受け入れる ← 座っている時は見守る
9～10月	好きな物は他の子どもの物を盗って食べる 嫌いな物はつまんで捨てる 手づかみで食べる 食べたくない時、満腹時には口に入れた物を出して遊び食いが始まる 満足すると席を立ち走り回る	← いけないことだと厳しく言う ← 捨てた時はダメだと怒って知らせる ← 介助しながらスプーンを使って食べさせる ← 側について声をかけながら楽しい雰囲気を作る
11～12月	左手にスプーンを持ち、右手でつかんで食べる 好きな物は他の子どもの物をとって食べる	← スプーンを右手に持ち換えさせ、介助しながら食べさせる ← お代わりのちょうだいを教える
1～3月	おやつを口にする 満腹になると残った物をこぼして遊ぶ	← 隣に座り、スプーン指導をしながら楽しい雰囲気を作る ← 少し見守り、やめさせる

に部屋を歩き回ることに対して、席に座って待つように話して聞かせている。ヒデキが食事を噛むことなく飲み込むように食べることにに対しては、担任がよく噛んでから飲み込むことをヒデキにやってみせるが、ヒデキはその意味がわからないようで、担任をまねることはない。

保育1年目のヒデキの食事は手づかみで食べることが改善され、11月にはスプーンが使えるようになり、食事の着席時間が長くなってきた。しかし、噛まずに飲み込むようにして食べること、盗食すること、遊び食いをすること、食べ終わると席を離れ動き回ることが改善していない。偏食は、ヒデキが野菜類を食べようとしなないことには変わりはないが、1月にはこれまで全く口にするのなかったリンゴやぶどうなどの果物を口に入れ、汁を吸うようになった。

担任はこの1年間、ヒデキをどのように理解してよいのか理解できず、ヒデキの示す行動に戸惑いを見せる。保育所入所後6～7カ月、ヒデキは不安な時に担任を求めることが多くなり、ヒデキと担任のあいだにはヒデキが担任に依存する関係が少し形成されたようである。そのような中で担任は、ヒデキの食事指導に対して、「食事はこうして食べなくては」というあるべき姿を直線的に求めるかのような対応となっている。すなわち、ヒデキが食べようとしなない物に対しては、食べることを促し、盗食については10月までは厳しく叱り、11月からはお代わりを教えるという対処である。噛まずに食べることに對しても、保育者がヒデキに噛んで食べるところを見せ、保育者と同じ行動をするように求めている。食事を終え、離席

してしまうことに対しては離席しないように話すことや、楽しい食事の雰囲気作りといった対処である。

2) 排泄指導の経過

表2は排泄指導の経過を示している。4～5月はトレーニングパンツのままで、排尿しても不快な様子を示すことはなく遊んでいる。排便をしてしまった時は、時々泣いて不快感を示す。6月に入り、トレーニングパンツから普通のパンツに替えると、ヒデキはパンツに排尿すると泣き出す、あるいはパンツに触る。4～5月は排泄に失敗したヒデキのパンツを取り替えようとする、ヒデキは嫌がって走り回ることが度々ある。6月に入ると排尿時に不快感を示す時もあれば示さない時もある。ヒデキが不快感を示した時は「気持ちが悪いよね、お着替えしよう」と声をかけながらパンツを替える。7～8月にかけてヒデキは、排尿をしてしまうと、時々泣きながら担任に抱っこを求めるようになる。そして、9月にはヒデキは排尿後、ズボンの前を触り担任の所へ時々は来るようになった。ところが11月に入るとヒデキの排尿が頻回になるが、それまでズボンの前を触りながら担任の所へ来ていたにもかかわらず、その様子を見せなくなった。1月に入り担任はヒデキの排尿が頻回なこともあり、時間を置いてトイレに連れて行き便器に座らせる。午睡後に便器に座り一度だけ排尿したが、便器に座る時間が長くなった3月になっても便器で排尿することはない。

担任は当初どのように排泄の指導をすればいいのか見通しを立てることができず、トレーニングパンツに排尿した時にパンツを取り替えることに

表2 保育1年目の排泄指導経過

	子どもの行動	保育者の対処
4～5月	トレーニングパンツに排尿をし気づかないで遊んでいる 便をした時は時々泣いている	← パンツを取り替えるが、嫌がって走り回る時がある ← 尻を洗い、「いい気持ち」の声かけ
6月	普通のパンツに替え、排尿時には泣いたりパンツをさわる	← 不快感を示した時は「しっこしたら気持ち悪いでしょう、着替えよう」と声をかける
7～8月	排尿すると時々泣きながら保育者に抱っこを求める	← 素早く着替えさせる
9～10月	パンツに排尿した後、保育者のところへ来て性器をさわり知らせることがあるが便は知らせない	← 知らせた時は爽めながら着替えさせる
11～12月	排尿が頻回になるが、知らせなくなる	← 「しっこしたら気持ち悪いでしょう、着替えよう」と声をかけながら着替えさせる
1～3月	トイレの便器に座ることができ、1度だけ便器に座り排尿	← 時間を置いてトイレに連れて行き便器に座らせる

終始している。トレーニングパンツを普通のパンツに代え、ヒデキが不快感を示した時に声をかけながら着替えを指導する。ヒデキが失敗した後、ズボンの前を触りながら担任の所に来た時は、担任はヒデキが知らせたことを褒めながら着替えさせている。ところが、ヒデキが知らせなくなるとトイレに連れて行きそこで排尿することを指導するようになる。担任がヒデキの排泄の自立を強く願っている気持ちはよく伝わるが、担任主導の排泄指導になっている。

2. 保育2年目の指導経過

保育2年目にはいるとヒデキは担任に対して安心した表情を見せ、担任に抱きついてくるようになる。担任との信頼関係が強まると同時に他児との関係が少し広がり一緒に活動することもできるようになる。その一方で、ヒデキ以外にも障害児保育対象の子どもが入所し、担任はヒデキと十分に関わることができなくなる。ヒデキは活動範囲が広がり、担任には危険で目が離せないと思える行動が増え、ヒデキを厳しく叱ることが増えてきた。

1) 食事指導の経過

表3は2年目の食事指導経過を示している。食欲はあり、好きな物になると他児の物を盗って食べてしまう。手づかみで食べることがなくなりスプーンを使うようになってきたが、こぼすことが多い。4月にはこれまでと同じように噛まずに飲み込むようになっていたが、7月にはしっかり噛ん

で飲み込むようになった。食事を終わるとヒデキはすぐ席を立ち動き回っていたが、11月からは、食べ終わるとすぐに席を立つことなく他児と一緒に「ごちそうさま」の挨拶をして席を立つようになる。野菜を食べようとしなない偏食は急に改善はしないが、1月からは限られた野菜だけが食べられるようになってきた。

この経過の中での担任の対応は、ヒデキの盗食に対しては、隣に座りスプーンの使用を介助しながら盗食が起きないようにしている。同時にこれは、まだスプーンをうまく使えないヒデキがこぼさないで食べられるようにという援助にもなっている。噛まずに食べることにに対しては、これまで同様、担任がヒデキに対しよく噛んで飲み込むところを見せている。食事が終わるとすぐに席を立ち動き回ることに対して担任は、ごちそうさまの挨拶がすんでから席を立つことを、着席時間の短いおやつを利用して4月から教えている。11月に入りヒデキは「ごちそうさま」のあいさあつをした後、席を立つようになっていたが、担任はヒデキが挨拶をしないで席を立った時は厳しく叱り、挨拶した時は抱きしめて褒めるという対応をしている。偏食に対する担任の指導は、8月頃までは楽しく食べる雰囲気作りを主眼にしているが、9月からは担任がヒデキの隣に座り、ヒデキが苦手としている物をスプーンに乗せ、口に運ぶという指導が始まっている。担任がスプーンに乗せてヒデキの口まで運び、それをヒデキが食べた時は「おいしいね」といって褒めているが、担任

表3 保育2年目の食事指導経過

	子どもの行動	保育者の対応
4～5月	好きな物は隣の子どもの物を盗って食べる 食べこぼしが多いがスプーンで食べている 食べ終わると席を離れ歩き回る	← 一緒に食べながらスプーン等の指導 ← おやつのごちそうさまをするまで座ることを教える
5～6月	噛まずに飲み込む 早く食べ終え席を離れる	← 保育者が噛んで飲み込むのを見せる ← 一定時間座るように、おやつのごちそうさまをして片づけを一緒にする
7～8月	おやつの時、椅子をもってきて準備する 麦茶を自分で入れる	← ほめて自信をつけさせる
9～10月	野菜は食べない 食べ終わると席を立ち走り回る	← 隣に座り苦手な物も口に運んでやる
11～12月	「ごちそうさま」をして席を離れる	← 指導する時は厳しく、座れたら抱きしめてほめる
1～3月	人参、ネギ、キノコをスプーンにのせて食べる おやつのお菓子を口に運ぶ	← 隣に座り、スプーンに乗せて口に運ぶ ← 苦手なものも食べたら「おいしいね」とほめる

はヒデキが食べたので「きっとヒデキもおいしいはずだ」という一方的な理解になっている。

保育2年目の食事指導では、ヒデキが担任の指導で少し変化が認められたこともあって、担任は「食事はこうして摂るもの」という思いがさらに強まり、偏食指導に見られるような保育者主導の指導である。

2) 排泄指導の経過

4月はさらに便器に座れる時間が長くなる。しかしトイレで排尿することはない。表4に示すように、パンツに排尿すると不快に感じるのか、自分からパンツを脱ぐようになる。5月に入りヒデキはパンツに排尿するとズボンに触れるようになる。担任がヒデキに着替えるようにいうとズボンとパンツを脱ぐ。6月から8月までこの状態は続く。7月にヒデキはパンツに排便をして床に正座していることがあったが不快感を訴えることはなかった。9月にはヒデキはパンツに排尿しているが、担任が「しっこしているよ」とヒデキに声をかけ、ズボンの前を触らせなければ着替えることをしなくなる。10月後半から12月にかけて担任はヒデキを決められた時間にトイレに行き便器に座らせる。ヒデキは便器に座ることを嫌うことはないが、排尿のタイミングがつかめず、トイレでの排尿はない。1月から3月にかけてヒデキはパンツに排尿すると、自分からパンツを脱ぐようになる。しかし、パンツは脱ぐものの着替えることをするわけではなく、パンツを脱いだまま遊んでいる。

担任はヒデキが便器に座る時間が長くなったこともあり、時間を見てヒデキをトイレに連れて行

き便器に座らせるが、なかなか排尿のタイミングがつかめない。ヒデキがパンツに排尿してズボンに触れるようになると、できるだけすぐに自分から着替えるようになって欲しいとでもいうかのように、パンツを脱いだら着替えることを繰り返して話すなど、着替えることを意識した指導となる。そして、1月からは時間排泄のための排尿記録をつけ始める。担任はヒデキが自分でパンツを脱ぐとそれを褒めてはいるが、全体的には排泄の自立に向けたゆとりのない指導になっている。

3. 保育3年目の指導経過

保育3年目は4月から7年半ばまでヒデキが不安定で、保育2年目までに身につけていたことができなくなっている。担任はその原因が家庭で母親がヒデキを叱ったことにあることを知り、7月から担任はヒデキが不安定な時、ヒデキの抱っこの要求を受け入れる。その後、ヒデキは担任にベツタリとくっついてくるようになり、担任はヒデキが繊細で壊れやすい心の子どもだと思えるようになる。

1) 食事の指導経過

保育3年目の4月、担任は3月まで食事中座って待つことができていたヒデキが、全く座ることができず、食欲がなく昼食を食べなくなっているのに戸惑う。好きな物とおやつ以外は食べず、食べ終わると落ち着かず、部屋の中を動き回る。7月に入り、ヒデキが不安定な時、担任が抱っこの要求を受け入れると落ち着くようになる。ヒデキが担任にベツタリすることが多くなると、担任は

表4 保育2年目の排泄指導経過

	子どもの行動	保育者の対処
4月	時々、パンツに排尿すると不快を感じて自分からパンツを脱ぐ 便器に座る時間が長くなる	← トイレでの排尿はないが、タイミングを見てトイレに連れて行く
5～6月	排尿するとズボンをさわり、保育者が着替えるよう言えばパンツとズボンを脱ぐ	← 排尿したまま遊んでいる時、ズボンをさわらせて着替えさせる
7～8月	排便した後、正座していることがある	← 排便に気づいたらズボンをさわらせて着替えさせ、排便後は尻を洗って着替えたら「気持ちいいでしょう」と声をかける
9～10月	排尿しても不快感がなく、保育者が「しっこしているよ」と声をかけると着替える	← ズボンを触らせて着替えさせる
11～12月	決められた時間にトイレに行き便器に座るが、排尿はない	← 無理強いはないがトイレに座る習慣をつけさせる
1～3月	パンツに排尿すると自分から脱ぐようになるが、脱いで遊んでいる	← 自分でパンツを脱いだことを褒め着替えさせる ← 時間排泄のために排尿記録をつけ始める

表5 保育3年目の食事指導経過

	子どもの行動	保育者の対処
4～6月	食欲が落ち、好きな物のみ座って食べる 昼食を食べず、おやつのみ食べる 一定時間座ることができなくなっている 食べ終わると席を立ち走り回る	← 見守る
7月	すこしずつ食事を摂り始める	← 食事以外でも1対1で対応
8月	魚のフライをお代わりして食べる 野菜を吐き出す 食器の片づけをする	← 「お魚ちょうだいしてきて」と皿を持たせもらいに行かせる ← 苦手な物を口に運んでやるが、吐き出したら無理強いはいしない ← 行動のひとつひとつを声かけして教える
9～11月	野菜を少しずつ食べる（9月） 保育者にわからないように野菜を吐き出す（10月） 好きな物と一緒に人参、ピーマン、ゴボウ、キャベツ、豆を食べる（10月）	← 吐き出したら叱ることを約束 ← 吐き出したら叱り、食べたら褒める ← 苦手なものは口に運んで食べさせ、吐き出そうとするとき「ダメ」という
12～1月	食べる野菜の種類が増える	← 刻んだりつぶしたりして食べやすくする
2～3月	保育者が口に運んだものは食べる これまで吐き出していたレバーを食べる	← 苦手なものは口に運んで食べさせ、吐き出そうとするとき「ダメ」という ← 刻んで食べやすくする

表6 保育3年目の排泄指導経過

	子どもの行動	保育者の対処
8月	パンツに排尿後、パンツを脱ぎ遊んでいる	← 脱いだものを保育士のところに持ってくるようにその都度話す
10月	パンツに排尿後、パンツを脱ぎ遊んでいる 保育者が着替えるようにいうと着替える 排便後、パンツを脱がず足を広げて歩く	← 排尿後トイレに連れて行き便器に座らせる ← トイレに連れて行き、その後着替えさせる
11月	排尿してパンツとズボンをお代わりで保育者が声をかけると、自分からトイレに行き便器に座る	← 失敗して自分からトイレに行かない時は排尿後、トイレに連れて行き便器に座らせ、その後着替えさせる
2月	パンツに排尿後、保育者に声をかけられればトイレに行くが、何も言わないと遊んでいる	← 失敗して自分からトイレに行かない時は排尿後、トイレに連れて行き便器に座らせ、その後着替えさせる

その関わりを保ちながら、食事に誘うと少しずつ食べるようになる。表5に示すように、8月には好物の魚のフライを欲しがるので、お代わりを教えると皿を持ちお代わりをもらいに行く。担任はヒデキが苦手としている野菜を口に運んで食べさせようとするがヒデキは吐き出してしまう。その一方で、保育者はヒデキに食器を片づけを教えるとヒデキは片づけをするようになる。9月に入り担任はヒデキの苦手とする野菜をスプーンに乗せ食べさせると少しずつ食べるようになる。ところが、本当に嫌な物は担任に見つからないように吐き出してしまふ。そこで担任は、ヒデキの好きな物と一緒に野菜を食べさせると、これまで食べようとしなかった人参、ピーマン、ゴボウ等の野菜でも食べるようになる。これを契機に2月には担任が口に運ぶと食べる野菜の種類が増える。さらに、これまで吐き出していたレバーも口元に運ぶと食べるようになる。

このようにヒデキの偏食は大きく改善し、食事の態度も落ち着いてきた。この変化に対して担任は6月まではただヒデキを見守ることしかできなかった。7月に入りヒデキが担任に甘えるようになってから、少しずつ食事に誘うようになる。そして、8月に入り担任は苦手な野菜などを口元まで運び、ヒデキを誘うが、ヒデキが吐き出すと無理強いはいしない。食器の片づけもヒデキが片づけ終わるまで、ひとつひとつの動作に対して声をかけ、注意が逸れないようにし、担任のペースに誘い込んでいる。9月以降、ヒデキは苦手としている野菜類を食べ始めているが、担任はヒデキが吐き出したら叱ることを約束し、担任がヒデキの口元まで運び、吐き出したら叱り、食べたら褒めるという対応に変わっている。この対応でヒデキが野菜を食べるようになると、今度は苦手としている物を細かく刻んだり、すり潰したりしてヒデキが食べやすくして口元に運んでいる。

保育3年目の前半では担任がヒデキの不安定な状態に戸惑っていたが、ヒデキを「繊細で壊れやすい心の子ども」という理解をするようになった後半は、少しずつ担任のペースに誘い指導するやり方から、約束を取り入れ苦手な物を口に運ぶという担任主導のペースでヒデキを巻き込む指導になっている。

2) 排泄の指導経過

4月からヒデキの不安定な状態が続くなか、排泄の状態は大きく変わることはない。ヒデキはパンツに排尿し、パンツを脱ぐが遊んでいる。担任はその都度着替えるように声をかける。表6のように、8月から担任は筆者の助言を受け、一貫した排尿指導を開始する。すなわち、パンツに排尿したら、パンツとズボンを脱ぎ、トイレに行き便器に座る。もしそれで排尿があれば排尿するが、排尿がなくても一定時間便器に座り、その後着替える、という一連の行動を徹底する。10月までヒデキは排尿後、パンツを脱ぎ遊んでいる。担任が着替えるようにいうとヒデキは着替える。11月になるとヒデキが排尿をしてパンツを脱いだので、担任が「ヒデキ」と声をかけると、自分からトイレに行き便器に座る。この状態は3月まで続き、担任の指示でトイレには行くが、指示がないとパンツを脱いだまま遊んでいる。

前半はヒデキが不安定なこともあり、これまでと変わらない指導である。8月に入り巡回相談講師の助言で一貫した排尿指導を開始する。これはそれまで便器に座らせるような断片的な指導ではなく、排尿から着替えまでの一連の行動を順に結びつけて指導することである。ここに来て、担任のヒデキに対する思い、すなわち、早期に排泄の自立を遂げて欲しいという思いがより具体的なものとなる。

4. 4年目の指導経過

保育3年目の終わり頃（2月後半）からヒデキが落ち着かなくなる。その状態は保育4年目の5月下旬まで続き、太鼓の音を聞くとパニックのような状態になるが、ヒデキの食欲は旺盛で食事指導もこれまでのようにヒデキの苦手な物を口元に運ぶと口にすることは続いている。排泄指導でも特別に変わった様子が見られないヒデキに、これ

までと変わらない指導を続ける。食事と排泄以外では担任はヒデキの行動を観察することを通してヒデキの独特の世界を実感するなど、ヒデキについての知識が積み重ねられていく。

1) 食事の指導経過

表7に保育4年目の食事の指導経過を示している。4月はこれまでのように担任が野菜をヒデキの口元に運んでやると、抵抗を示すことなく食べる。担任が口元に運んでやりさえすればたいていの物は食べる。5月下旬、昼食にコロッケが出る。ヒデキはコロッケを食べるがその中に入っているグリーンピースを吐き出してしまう。そしてヒデキは担任の顔を見て、吐き出したことがまずかったと感じたのか、吐き出してしまったことをごまかすかのようにして笑う。担任は、いつもなら叱るのだが、このときはヒデキと一緒に笑い、とがめることをしなかった。6月からはヒデキの情緒が安定し、ヒデキの苦手な物を担任が口元まで運ぶこと以外には食欲、食べる時の技術や態度、準備や後片づけなど他の子どもと特に異なる指導は必要がない。9月下旬の昼食時、いつもは担任がヒデキに手を洗うように促し、手洗い、着席、挨拶という順番で食事を始めるのだが、この日はヒデキが「いただきます」のポーズで食事を準備しているテーブルの周りを歩いていた。そのときヒデキは担任に対して直接訴えていたわけではないが、担任はヒデキが空腹で「早く食べたい」と訴えていると理解し、ヒデキのために食事を準備する。するとヒデキは自分で椅子を持ってきて食べ始めた。さらに、11月下旬に1週間ほど休んでいたヒデキは、12月初旬の食事の時、これまで同様担任が野菜を口元まで運び食べさせようとするとそれを拒否して食べなくなる。担任が食べさせようとすると拒否して、自分のペースで食べる。また、骨付きのチキンが出た時、それを食べ終えたヒデキは隣の子どもの隙を見て、隣の子どもの骨付きチキンを盗って食べようとした。それに気づいた担任がヒデキを叱ると、ヒデキはチキンを投げて食べようとしなかった。これまでとは違うヒデキの反応に担任は多少の戸惑いを感じた。2月に入り、担任が食事に誘うとヒデキが抵抗をして怒ることが多くなる。担任はその原因がヒデキを食事に誘う時の誘い方にあることに気づいた。すなわ

表7 保育4年目の食事指導経過

	子どもの行動	保育者の対処
4月	野菜を食べることに抵抗がなくなる	← 苦手な物を口に運んでやるが食べたらほめる
5月	コロケのグリーンピースを吐き出し、保育者の顔を窺う 保育者の微笑みに嬉しそうに笑う	← 叱らず微笑んで返す ← いまは受け入れることが大事と一緒に笑い笑う
9月	テーブルの周りを「いただきます」のポーズで歩き回る 準備できると自分で椅子を持ってきて食べる	← 食べたがっていることに気づき、準備する
12月	苦手な物を保育者が口に運んで食べさせようとする 拒否して、自分のペースで食べる 他児の骨付きチキンを保育者が見ていない時に盗って食べようとする	← 本人のペースに任せる ← 保育者が叱るとチキンを投げて食べなかった
2月	食事に誘うと怒るようになる 「ご飯だよ」と呼んでも座ろうとしない 水筒を見て走ってきて、麦茶を飲んで食事を始める おやつや食事のとき、誘ってもこない 食べたくない時は首を振る	← 手を引いて誘っていたので、手を引くことをやめる ← 大好きな水筒を見せる ← 実物を見せて食べるか否か本人の意思を確認する ← 本人の意思を尊重する

表8 保育4年目の排泄指導経過

	子どもの行動	保育者の対処
5月	これまであまりなかった排便の頻度が増え、人のいないところで排便する	← 排便前の様子を観察する ← 排便したら知らせるように話し着替えさせる
9月	排尿の様子に気づきトイレに連れて行くと、緊張して体に力が入り 排尿しないが、トイレから戻ると数分後に排便する 戸外で便をすることが増える 食後に戸外で便をして、便が足についたことを保育者に知らせる	← 排尿の様子を観察する ← 便をした後、保育者に知らせるように言う ← 知らせたことを褒め、尻をシャワーで流す
10月	午睡時に身体に力を入れているので保育者が尿意に気づきトイレに連れて行くと排便する 1度、トイレで排便できるとリラックスして排便できるようになり 時間排泄を始める	← 排尿の前後の行動を観察し、うまくでたら褒める ← 食事と着替えの後にトイレに連れて行き、うまくいくことを確認後、時間排泄に移行する
11~12月	時間排泄でも失敗することはない 声をかければひとりでトイレに行き、失敗はない	← 様子を見ながら水分摂取量を調節する ← ひとりでできるように保育者はすこしずつ離れていく
1~3月	時間排泄をしなくても失敗しなくなる	

ち、ヒデキが遊んでいる時、担任がこれまでと同じようにヒデキの手を引いて食事に誘っていたのである。そこで担任は一度、ヒデキに「御飯だよ」と声をかけて誘い、それでも食事に来ない時は、担任は水筒をヒデキに差し出して見せ、食事に誘う。するとヒデキは走ってきて麦茶を飲んでから食事を始める。同じようにおやつの際に担任はその日のおやつの実物をヒデキに見せる。ヒデキは実物を自分の目で確かめ、「食べたい」と思った時は頷いて自分で椅子を準備するが、食べたくない時は首を横に振り、「食べたくない」という意思を表示する。

担任の4月までの偏食指導はヒデキの苦手とする野菜を口元まで運び、食べると褒めるといふ担任のペースに巻き込む対処である。ところが5月に入り、ヒデキがコロケに入ったグリーンピースを吐き出し、担任の顔を窺い笑うが、担任はそれ

に対して叱ることなく、微笑んでいる。いまは叱る時ではなくヒデキとの関係を大事にしようと考えなどヒデキの状況を見て対処するように変化している。担任のそれまでの「かくあるべき姿」を求める対処法に変化が見られる。そして、9月にヒデキが「いただきます」のポーズでテーブルを回って歩いている時、担任はヒデキが空腹であることを察し、ヒデキがすぐに食べられるように準備をしている。何よりも大きく変化した担任の対処方法は偏食指導である。担任が口に運んで食べさせることを拒否するヒデキに対して、本人のペースで食べることを認める。また、担任の食事の誘いを拒否する時、これまでの自分の誘い方を振り返り、ヒデキがわかりやすく抵抗がないように水筒を見せて誘う、あるいはおやつの際、実物をヒデキに見せ、食べるか食べないかを本人に決めさせるなどヒデキの主体性を尊重し柔軟に対処

している。

2) 排泄の指導経過

ヒデキの情緒が不安定な間も排尿はこれまで指導してきたのと同じ状態である。表8は排泄指導の経過を示している。5月に入ると、表8のようにこれまで保育園ではあまりなかった排便の回数が多くなる。それもヒデキは押し入れや畑、園庭など人のいないところを探して排便している。9月初旬、ヒデキは食後に戸外で排便することが多く、排便の後担任の肩をヒデキが叩くので振り返ると、ヒデキの足に便がついており、担任はヒデキが知らせたことを褒め、シャワーで洗い流す。同じ頃ヒデキは、家庭でも風呂場で排便した後、母親に知らせるようになっていく。また同じ頃、担任がヒデキの様子を観察していると、排尿の感じがあるので、トイレに連れて行くとヒデキは身体に力が入り排尿できない。ヒデキが排尿できないので担任はヒデキをトイレから連れて帰ると、その直後に排尿する。そこで担任はヒデキの排尿の様子を観察するようになる。10月初旬、午睡時に担任はヒデキの横で添い寝をしていると、ヒデキが下半身に力を入れ、息を吸ったり吐いたりしていることに気づく。担任はとっさに「排尿だ」と感じ、ズボンとパンツを脱がせトイレに連れて行く。その結果、ヒデキはトイレで排尿することができた。一度トイレで排尿できるようになったヒデキはその後緊張することなくトイレで排尿が可能となる。そして同じ頃、ヒデキは自宅でも排尿の前に母親の手を取りトイレに行くようになっていく。担任は、10月下旬から時間排泄を始める。12月までの間、時間排泄を行ったが失敗することはなかった。1月に入り、担任は時間排泄をせず、ヒデキの様子を観察する。すると担任がトイレに行くことを促すことをしなくても、自分からトイレに行き排尿するようになり、失敗することもなくなった。

ヒデキの排尿が自立するきっかけは、担任が午睡の時、ヒデキの様子を見て息を吸って吐き出す脱力の感じが担任の身体を通してわかり、とっさに排尿だ、とわかったことだという。このときヒデキはうまいタイミングで排尿をした。それまでのヒデキは排尿の前に身体に力が入り、緊張してトイレでは排尿できず、トイレから戻ると緊張が

ほぐれそこで排尿してしまっていた。この対応は、担任がヒデキの排尿の様子をよく観察し、また、排泄以外の指導においても担任はヒデキの様子を観察しており、担任のヒデキについての知識が増したからこそできた対応である。

IV. 考 察

食事と排泄の指導経過を振り返ると、その転機は保育3年目にあることがわかる。保育3年目は担任がヒデキの不安定な状態を「繊細で壊れやすい心の子ども」という理解をして、ヒデキとの1対1の対応を重さねながらヒデキが落ち着けるように受け入れ、ヒデキと担任の愛着関係が深まった時期である¹⁴⁾。保育2年目までの対応とどこが違うのだろうか。保育所や幼稚園などの集団生活の場において障害のある子どもたちの食事や排泄指導では、食事や排泄を部分的に取り出して指導するのではなく、子どもが充実した生活を送るなかで、生活の一環として指導することが必要だとの指摘がある^{5), 6)}。そして、これらを指導する側は食事や排泄が自立できるための要因をしっかり把握した上で、見通しを持った指導を行うことが必要だという。とりわけ子どもが精神的に安定できるような人間関係は、自立のためには欠くことのできない要因だといわれている^{5), 6)}。担任は保育2年目まで、ヒデキをどのように理解すればよいのか十分にわからず、担任が期待するような行動の少ないヒデキに対し、何とかして担任が期待する行動をとるようにせき立てるような対応になっている。例えば、食事指導ではヒデキの手を取りスプーンに野菜を乗せて口元まで運び、偏食とスプーンの使用を教えようとし、噛まないで食べることについては、担任が噛んで飲み込むことを見せている。このような対応をする担任は、なぜスプーンを使用せず、偏食や噛まないで飲み込むことになるのか、あるいは担任の対応に対してヒデキがどのように感じるかなど十分に検討することなく、担任のペースに強く巻き込む対応である。排泄指導ではパンツに排尿しても不快感を示すことがない状態であれば、ヒデキが排泄に失敗し、不快に感じたらそれを何らかの表現で担任に知らせるような関係を作ることがまずは必要で、

そのために担任は着替えさせた後、気持ちがよくなったことをヒデキと十分に共有するような対応がなされなくてはならない。ところが、担任はヒデキが性器やズボンに触り不快な素振りを見せた時、「気持ち悪いね」や「着替えたら気持ちよくなったね」ということばをかけ、着替えさせてはいるが、ヒデキが不快感を持った時、それを担任に伝えようとする関係を作ろうとはしていない。保育所の日常生活ではヒデキが担任とそれ以外の保育者を区別し、担任に対して愛着行動を示すこともあるが、担任は他の障害児保育対象児に関わらざるを得ないこともあり、ヒデキと十分な関係が形成できていない¹⁴⁾。このようなヒデキと担任の関係にもかかわらず、担任はヒデキをトイレに連れて行き便器に座らせる。このような指導方法を採らざるを得ない担任の懸命さは十分理解できるが、この対応をヒデキはどのように感じるかというヒデキの立場を考慮した指導にはなっていない。ここでも強く担任のペースに巻き込む対応になってしまっている。保育2年目の3月にヒデキはパンツに排尿すると自分からズボンとパンツを脱ぐようにはなっているが、脱いだ後、担任の所に来ることもなくひとり遊んでいる。このことはヒデキのパンツを脱ぐという行為は、そのまま完結してしまい、担任に脱いだことを知らせるといふ結びつきになっていない。換言すれば、担任との安定した関係が形成されないまま身についたヒデキのパンツを脱ぐ行為は、不快感を担任に知らせるといふ社会的な行為にはなっていない。

保育3年目は4月からヒデキの状態が不安定で、担任はヒデキを見守りながら無理のない対応にならざるを得ない。それだけではなく、担任はヒデキの不安定な原因を知り、ヒデキが要求する抱っこを受け入れると、ヒデキは担任にベッタリとくつき担任に強く依存する。このような関係になった後、食事ではヒデキが担任の誘いに乗るかのようにして、これまで苦手としていたものを口元まで運ばれても抵抗を示すことなく食べるようになり、担任もヒデキの苦手なものは刻む、つぶすなどヒデキが食べやすいように手を加えている。また、お代わりや片づけなどのやり方をヒデキが混乱しないように、担任がひとつひとつの行為に声をかけるなど丁寧な対応をするとヒデキは担任が

教えたように行動できるようになる。排泄指導では一貫した指導を始め、尿意(便意)の確立、場の認知、排泄のための技能獲得という一連の行為をヒデキが理解しやすいように同一の手順で教えている。このように担任のペースで指導がなされているが、ヒデキが受け入れ、理解しやすいように指導に丁寧さが加わっている。この対応の変化は担任がヒデキを「繊細で壊れやすい心をもった子ども」と理解し、「もっと子どものことを知りたい」とヒデキに対する積極的な関心を持ったことが契機となっている。ヒデキにすれば家庭で母親からきつく叱られ、重要な他者である母親に対する信頼が揺らぎ始め不安定にならざるを得なかった。そのような折りに、担任はヒデキの不安定な状態をそれこそ丸ごと抱える対応をとった。ヒデキにすれば自分ではどうしようもない不安な状態を受け止めてくれた担任は、これまで以上に信頼できる存在となった。そのようななかで担任は、これまでも増してヒデキが誘いに乗りやすくなるような手だてを講じた。だからこそヒデキは担任の誘いに乗りやすくなり、担任の指示通りの行動がとりやすくなった、と考えられる。

担任のヒデキに対する対応の変化は保育4年目ではさらに大きくなる。この背景には日々の保育のなかで担任がヒデキの環境世界の捉え方、感じ方についての知識を蓄積して、ヒデキは教えたことは身につけていくというヒデキに対する信頼と多少のことがあってもヒデキをしっかり支えて保育してゆけるという担任の自信がある¹⁴⁾。そのことが食事場面の対応ではヒデキが口に入れたものを吐き出した時、担任を見て笑ったヒデキを叱ることなく、「いまは、ヒデキとの関係を大事にしよう」と微笑み返す対応になり、食事準備中にヒデキが食べたそうなそぶりを示すと、すぐにヒデキのために準備する柔軟な対応になったといえるだろう。そしてヒデキに対する理解と信頼の深まりは、担任が食事を口まで運んだ時、それを拒否したヒデキの行動を受け入れ、ヒデキのペースで食べることを認めたことや食事を無理に誘わずヒデキの判断に委ねるヒデキの主体性を尊重した対応によく表れている。担任の対応は「いまは特別に認めるけど、いつもはダメだよ」という両義的な対応⁹⁾である。担任はこのような対応を少な

くとも保育3年目の前半まではとることができなかった。それが、ヒデキのことをもっと知りたいと積極的な関心を向けるようになった後、この対応ができるようになった。このことは、担任は子どもに積極的な関心を向けることを通して、担任の柔軟な自我の現れといえる両義的な対応が発揮できるようになったことを示している。排泄指導の面では尿意が高まってもトイレで排尿できないヒデキに対して、午睡時に添い寝をしている担任がヒデキの様子を見てヒデキの尿意を間身的に感じ取り、トイレに連れて行き排尿に成功する。このような対応は、担任がヒデキに「いつも、すでに」のメタ水準の関心⁸⁾を向けていたからに外ならない。これまでヒデキは尿意の高まりを感じてトイレで排尿しようと試みるが、その瞬間は緊張も同時に高まりトイレでは排尿できない。トイレから戻ると緊張がゆるみ排尿してしまう。担任にすれば何とかタイミングさえ合えばうまくいくのという思いを持ってヒデキの排尿の様子を観察していた。そのようなことが続いている時の午睡時、ヒデキを寝かしつけていた担任はヒデキを見て瞬間的にヒデキの尿意を感じ取っている。「排尿したいヒデキの気持ちが伝わってきた」という担任の表現は、間身的にヒデキの訴えたことを理解したと考えることができる。つまり、ヒデキと担任は身体が互いに感じ表情するという原初的コミュニケーション⁹⁾が展開されていたといえる。

V. 結 論

食事や排泄の指導は表面的にはこれらに関する行為を教える側が教えられる側に、その社会・文化のなかで許容される方法で行うように指導することにある。最終的には教えられる側が、好ましいといわれる対処様式を身につけることで終結するが、その過程においては教える側と教えられる側が相互の思いをぶっつけ、ぶっつけられながら、それを受け入れたり、拒否したりというやり取りが展開される。教える側は教えられる側の思いを酌み取り、受け止めながらもすべてを受け入れることなく、あるべき姿を要求することもあれば、教える側の思いを一時棚上げして、教えられる側

の思いを受け入れる対応をすることもある。このようにして見れば、食事や排泄の指導は、基本的には教える側と教えられる側のコミュニケーションの過程として捉えることができる。最近では、自閉症の中核障害を社会性の問題^{1), 2), 7), 12)}に求める考え方が主流となっているが、食事や排泄のような社会・文化的背景に大きく影響される行為の指導では、教える側は表面に現れる形式の指導にとどまることなく、教えられる側の子どもと教える側の大人が文化的あるいは社会的意味を共有するなかで、子どもの側が社会的な行為として受け入れ、しかも彼らの主体性を尊重した指導を展開する必要がある。そのためには、教える側の保育者が子どもをどのように理解するのか理解のありようが重要になる。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、与儀飛香さん（元担任保育士）に多大な協力をいただきました。心より感謝いたします。

文 献

- 1) Baron-Cohen, S. (1988): Social and Pragmatic deficits in autism: Cognitive or affective?. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 18, 379-402.
- 2) Hobson, R.P. (1989): Beyond cognition: A theory of autism. In Dawson, G. (ed), *Autism Nature, Diagnosis, and Treatment*, 282-309. Guilford Press, New York.
- 3) 星野仁彦, 小松文子, 熊代永 (1992): 幼児自閉症における偏食と食行動異常に関する調査. *小児の精神と神経*, 32(1), 59-67.
- 4) 星野仁彦, 岡野淳子, 金子元久, 八島祐子, 熊代永 (1993): 幼児自閉症における精神運動の特徴—津守・稲毛式乳幼児精神発達検査を用いて—. *小児の精神と神経*, 33(1), 33-41.
- 5) 飯田雅子 (1997): 発達に遅れがある子どもの日常生活 1. 食事指導編. 学習研究社, 東京.
- 6) 飯田雅子 (1998): 発達に遅れがある子ども

- の日常生活 3. 排泄指導編. 学習研究社. 東京.
- 7) 小林隆児 (2000) : 自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—. ミネルヴァ書房. 京都.
- 8) 鯨岡峻 (1997) : 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房. 京都.
- 9) 鯨岡峻, 鯨岡和子 (2001) : 保育をさせる発達心理学 関係発達保育論入門. ミネルヴァ書房. 京都.
- 10) 水野真由美, 西村辨作, 若林慎一郎 (1977) : 自閉症児の精神発達に関する研究—発達群と遅滞群の比較—. 小児の精神と神経, 17(1), 1-12.
- 11) 永井洋子 (1983) : 自閉症における食行動異常とその発達機構に関する研究. 児童青年精神医学とその近接領域, 24(4), 260-278.
- 12) Ozonoff, S., Pennington, B, F, & Rogers, S, J. (1991) : Executive function deficits in high-functioning autistic individuals : Relationship to theory of mind. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 32, 1081-1105.
- 13) 財部盛久 (1988) : 精神遅滞児 (者) の食習慣と肥満. 琉球大学教育学部紀要, 32(2), 279-289.
- 14) 財部盛久 (2002) : 統合保育における自閉症圏障害児の行動と保育者の子ども理解. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 4, 29-49.
- 15) 外山紀子, 無藤隆 (1990) : 食事場面における幼児と母親の相互交渉. 教育心理学研究, 38(4), 395-404.
- 16) 若林慎一郎 (1983) : 自閉症児の発達. 岩崎学術出版社. 東京.